

これからの日本がなすべき

美的な文化力の涵養と発信

経済、文化、宗教など、世界が混迷する中で

日本が果たすべき役割が求められている。

世界の文明をさまざまな形で

吸収してきた日本が今後なすべきことは何か。

川勝平太静岡県知事と

日独文化研究所長の大橋良介氏が

京都産業大学世界問題研究所長・

静岡県補佐官(対外関係担当)の

東郷和彦氏を交え、

「日本の普遍性を問う」を

テーマに語り合った。

美的な力で覇権主義と対峙

東郷氏 川勝知事は、「日本はこ

れまでの世界文明というものを

いろいろな形で受け入れ、どち

らかと言えは海外の文明に憧れ

る国であったものが、逆に「憧れ

られる」立場にそろそろなっ

てきた。問題はそれが日本がこれ

かどういふ発信をしていくのか

にあるとおっしゃっています

が、大橋先生はどのように思わ

れますか。

大橋氏 中国や欧米の文明を取

り込み終わった日本の文明が、

今後どこへ行くのかという問い

は、ますます大事になってきて

います。その場合、知事も私も

「美」という観点を入れています

。力づくでグリグリと覇権主

義的に国を拡張していく方向と

は違うものです。問題は覇権主

義の力に対して美的な力がどう

の価値への傾斜を体現している

のが日本ではないでしょうか。

美の力とは惹き付ける力です。

東郷氏 日本の学生がドイツに

行ったときには、ドイツの哲学

対峙するかです。これからの日

本がなすべきことは、この美的

な文化力の涵養と発信に尽きる

と思います。

例えば、ドイツに中国からた

くさんの哲学留学生がやって

来ます。中国の留学生は西洋哲

学を受け入れる根本姿勢とし

て「西洋にアリストテレスがい

るなら、こちらには孔子がい

る」といった意識です。中心は

こちらにある、中心を取り戻さ

ねば、という姿勢です。日本人

はまず自分をなくし、相手から

学ぶ姿勢を持っています。その

代わり独自のものを展開する

姿勢は稀薄となります。文化力

の涵養と発信という観点では、

それが問題になることもあり

ます。しかし世界の諸潮流に接

すると、日本文明はナシヨナリ

ズムという偏狭な観点ではな

く、もつと自覚にもたらしべき

内容を持つていると思います。

月並みな表現ですが、日常世界

に埋もれているものにこそ、本

当の意味での「伝統の力」が含ま

れていると思います。だから、

日本の美的感性の力、「慈しみ」

の意識は今後大きく開花する

可能性があると思います。

知事 文明には憧れの感情が伴

いますが、文化には懐かしさの

感情が伴うように思います。懐

かしいという感情には悲しいば

かりに「慈しむ」という情意の働

きがあるように思います。

力の問題については、幕末の

日本人は欧米を列強と見なし

ました。むき出しの力の存在と

見たのです。欧米は自らを「文

明」、欧米以外を「野蛮」と認識

していました。日本から見れば

「力の文明」です。

国が整えるべき体系につい

て、国際政治学者の高坂正堯先

生は、力の体系・利益の体系、価

値の体系の3つが三本柱だと

おっしゃっています。力の体系

は軍事力、利益の体系は経済

力、価値の体系は文化力に置き

換えられます。日本は、戦前期

外交のエッセンスは何かとい

うと、まず人の話を聞くこと

です。人の話を聞いて、自分の意見

と違い、自分の利益と全く異な

るものであっても、聞いた上で

自然であると思います。水がき

れいなので「みずみずしい」とか

「水際立った」などの表現が生ま

れました。水の清らかさは日本

人の美意識の基本です。美意識

自体は多様ですが、日本では水

が物的基準になっているのでは

ないでしょうか。欧米が力の文

明で世界を征服したとすれば、

日本は美の文明で世界を惹き付

けることができます。

大橋氏 知事の著書に「文化

力」という本がありますね。「文

化」に「力」という概念を加えた

もの「文明」だと言っている

と思います。その文化力の核心

に美的なものがあります。その

場合、日本の「自然」が大きな意

味を持ちます。

中国で美しいとされるものは

玉、宝玉です。それに対して日本

は水。つまり、宝玉という永劫的

なものではなく、さつと流れる

透明な水に日本人は美を感じて

いました。

平安朝文学では「はかない」と

いう言葉がよく出てきます。「は

かない」は「はか」(涯、果て、際)

がない、ということのようです。

単にとりとめがないのではな

い

い

い

い

い

い

い

い

い

い

い

い

い

い

い

い

い

い

い

い

静岡県知事
かわかつ へいた
川勝平太

哲学者・日独文化研究所長
おおはしりょうすけ
大橋良介氏

京都産業大学世界問題研究所長
静岡県補佐官(対外関係担当)
とうごう かずひこ
東郷和彦氏





京都産業大学世界問題研究所長
静岡県補佐官(対外関係担当)
東郷 和彦氏

1945年長野県生まれ。京都産業大学教授・世界問題研究所長。外務省で北方領土交渉ほか対ロシア関係を中心に勤務し、2002年退官。外国の大学で教え始め、アジアの歴史問題等を研究。日本の思想や景観問題にも関心。10年より世界問題研究所長、11年より静岡県補佐官(対外関係担当)。近著に『戦後日本が失ったもの』(角川書店)、『危機の外交』(角川書店)など。

「空の情意」というものがあり、そこから湧き出てくる情意に「はかなさ」「無常」「覚悟」といった感性の究極があります。そこにはキリスト教の「愛」とは違ったものを感じます。「玉」でなく「水」を美しく感じる方向には、そんな奥深さがあると思っています。

「空の情意」というものがあり、そこから湧き出てくる情意に「はかなさ」「無常」「覚悟」といった感性の究極があります。そこにはキリスト教の「愛」とは違ったものを感じます。「玉」でなく「水」を美しく感じる方向には、そんな奥深さがあると思っています。

「空の情意」というものがあり、そこから湧き出てくる情意に「はかなさ」「無常」「覚悟」といった感性の究極があります。そこにはキリスト教の「愛」とは違ったものを感じます。「玉」でなく「水」を美しく感じる方向には、そんな奥深さがあると思っています。

「花」は頂点で、そこから先に「散る」「枯れる」「死ぬ」が待っています。「生死」の極点のようなところが「花」です。世阿弥はそれを知った上で『花伝書』を書きました。その中に「初心忘るべからず」という語が出てきます。3種類あります。云を始めた頃の初心を忘れるな、「芸が達者になつたときも初心を忘れるな」「老年になつても初心を忘れるな」です。特に3つ目がすごいんです。老年になつた世阿弥は権力者の庇護を失って不遇のどん底にいますが、かつての「花」の時代より芸境が格段に深まっています。だから「最後の初心を忘れない」と述べたのです。そこに人間のコンパッションの深い表現を見ることが出来ます。「空の情意」ですね。

「花」は頂点で、そこから先に「散る」「枯れる」「死ぬ」が待っています。「生死」の極点のようなところが「花」です。世阿弥はそれを知った上で『花伝書』を書きました。その中に「初心忘るべからず」という語が出てきます。3種類あります。云を始めた頃の初心を忘れるな、「芸が達者になつたときも初心を忘れるな」「老年になつても初心を忘れるな」です。特に3つ目がすごいんです。老年になつた世阿弥は権力者の庇護を失って不遇のどん底にいますが、かつての「花」の時代より芸境が格段に深まっています。だから「最後の初心を忘れない」と述べたのです。そこに人間のコンパッションの深い表現を見ることが出来ます。「空の情意」ですね。

「空の情意」というものがあり、そこから湧き出てくる情意に「はかなさ」「無常」「覚悟」といった感性の究極があります。そこにはキリスト教の「愛」とは違ったものを感じます。「玉」でなく「水」を美しく感じる方向には、そんな奥深さがあると思っています。

「空の情意」というものがあり、そこから湧き出てくる情意に「はかなさ」「無常」「覚悟」といった感性の究極があります。そこにはキリスト教の「愛」とは違ったものを感じます。「玉」でなく「水」を美しく感じる方向には、そんな奥深さがあると思っています。



哲学者・日独文化研究所長
大橋 良介氏

1944年京都府京都市生まれ。日独文化研究所長。1969年京都大学文学部哲学科を卒業。1973年ミュンヘン大学哲学部で哲学博士号取得。1983年ヴュルツブルク大学でドイツ大学の教授資格(ハビリタチオン)を、日本人で初めて取得。京都工芸繊維大学教授、大阪大学教授、龍谷大学教授等を歴任したあと、ケルン大学、ウィーン大学、チュービンゲン大学等の客員教授を経て、2014年より現職。著書は哲学専門書のほかに、「日本的なもの、ヨーロッパ的なもの」(新潮社、増補版は講談社)、『京都学派と日本海軍』(人文書院)など。ドイツ語での出版も10点を数える。



静岡県知事
川勝 平太

1948年京都府京都市生まれ。1972年早稲田大学政治経済学部を卒業。1975年早稲田大学大学院経済学研究科修士課程修了。1985年オックスフォード大学博士号取得。早稲田大学政治経済学部教授、国際日本文化研究センター教授、静岡文化芸術大学学長を経て2009年より現職。著書に『日本文明と近代西洋』(NHKブックス)、『文明の海洋史観』(中公文庫)、『鎖国と資本主義』(藤原書店)など。

「空の情意」というものがあり、そこから湧き出てくる情意に「はかなさ」「無常」「覚悟」といった感性の究極があります。そこにはキリスト教の「愛」とは違ったものを感じます。「玉」でなく「水」を美しく感じる方向には、そんな奥深さがあると思っています。

「空の情意」というものがあり、そこから湧き出てくる情意に「はかなさ」「無常」「覚悟」といった感性の究極があります。そこにはキリスト教の「愛」とは違ったものを感じます。「玉」でなく「水」を美しく感じる方向には、そんな奥深さがあると思っています。

「空の情意」というものがあり、そこから湧き出てくる情意に「はかなさ」「無常」「覚悟」といった感性の究極があります。そこにはキリスト教の「愛」とは違ったものを感じます。「玉」でなく「水」を美しく感じる方向には、そんな奥深さがあると思っています。

「空の情意」というものがあり、そこから湧き出てくる情意に「はかなさ」「無常」「覚悟」といった感性の究極があります。そこにはキリスト教の「愛」とは違ったものを感じます。「玉」でなく「水」を美しく感じる方向には、そんな奥深さがあると思っています。